

「錦にしきの中の仙女」

近藤伊津子・編

このお話は、近藤伊津子さんが台湾を訪問された際、「中国童話」の編集長呉さんの許可を得て収集されたものです。古くから台湾に伝わるお話ばかりです。今後、少しずつ紹介していく予定です。が、日本の民話との違い等味わいながらお読みいただきたいと思えます。

中国の西南地方（雲南省）では、むかしから錦織の名産地として名高く、「僮錦トンチン」と呼ばれていました。

むかし、この村に錦織の名人の羅らのおっかさんがいました。早くに夫に死なれ、息子の羅ら洛らくと住んでいました。ヤセ地の村は獲れる物もなく、羅のおっかさんは機はた仕事をし、息

子は樵きざりをしてくらしていました。

ある日、村に乞食の婆さんがきましたが、村人の家ではどこも戸さえ開けずに追い払いました。

ところが息子の羅洛ろらくがわずかばかりのかゆを恵み与えると、乞食婆さんはすすり込み、口を拭くと、「若者よ、この一卷の絵をお前、お前のおっかさんに進ぜよう。この絵の通りに錦を織ったならば、お前たちには運がむいて来るじゃろうよ」と言うと、懐から巻絵をとり出しました。

息子の羅洛ろらくは家に持ち帰ってひろげてみると、あまりに美事な風景なので、二人ともしばらくは息がつかないほどでした。山や川はもちろんのこと、どこまでも広がる田や畑、たわわに実をつけた木々、その中にたたずむ家。

羅のおっかさんは、「ああ、こんなところに住めたら、どんなによかろうか……。この稲穂はたっぷりとしていて、さぞうまい飯が炊けるだろうて」といって深い嘆息なげいきをつきましたが、すぐにこの風景を、そっくり錦に織り上げてみようと決心したのです。

さあ、それからというもの、羅のおっかさんは、寝食しんじきも忘れ、明けても暮れても織機の前に座りつきりでした。パターンコトン、パターンコトンと織音が響き、一年が過ぎ、二年が過ぎました。二人のくらしむきは前より一層苦しくなり、その上、羅のおっかさんは目を悪くしてしまい、ほとんど見えない位になりました。

羅のおっかさんの織る錦は、あ、巻絵の中の青い山、黄色こがねの稲穂、うれた赤い果実くだものがそ

つくりに織込まれていて、いいえもしかしたら、巻絵より、もっと美しかったといつてもいいほどでした。

又、羅のおっかさんは、巻絵にないものも織り込みました。家の前の草原に、自分が息子がうれしそうに笑って立ち、池の辺りには、ほっそりとした若い娘を織り込んだのでした。息子の羅洛はきつと、こんな嫁をもらうに違いないと思つてのことでしたが、ただ、その顔の目鼻立ちはどうにもならなくて、織込むことが出来ませんでした。

その日、赤くなつた目をしばたかせながら、「息子や、おっかさんの目は、もう、いよいよ見えなくなつてしまつたよ。家の外で、おてんとさまの下でなら見えるかもしれないので、織機と巻絵を運んでおくれ」といいました。

息子の羅洛は、おっかさんの頼み通りに外に運び出しましたが、そうするやいなや、シユウと怪しげな一陣の風が、織りかけの錦を空中高く吹き飛ばしてしまいました。

羅のおっかさんは、この突然の出来事に氣を失わんばかりになりましたが、息子の羅洛に、どんなにしても織りかけの錦布を探して来てくれるよう頼みました。

息子の羅洛は錦布が飛んでいった方向をめざして、走りに走りました。けれどもどこまで走つても見つけれられず、茫然としてみると、そこに老婆が、どこからともなく現われ、錦布を探しているのかたずねました。

そして老婆は懐から一振りの剣と一幅の黒馬の絵と、黄金の塊りを十個取り出し、言いました。

「お前の探している錦は北海の仙女に取られたのじゃ。仙女たちは錦の美しさに心を引かれ、自分たちもそっくりに織ってみたのじゃよ。」

もし、お前がどうしても取りもしに行くのならば、まずこの剣で指を切り、血をこの絵の黒馬の目に落とすのじゃ。するとな、この馬はお前を仙女の住むところへ連れていくじやろう。

だが、うまく取もどせるかどうかはわからん。それでじゃ、行くのを諦めて、このまま帰るのなら、この黄金は、そっくりお前の手に残るといふものじゃ。どちらにするかね。お前が決めるのじゃ」

老婆が言い終らぬ内に、息子の羅洛は、剣で指を切り、黒馬の目に落しました。

黒馬はたちまち絵から抜け出て、羅洛をのせ、北の方へと飛び立ちました。

しばらく飛び続けて、初めに着いたところは、燃えさかる火焰山^{カエンザン}。たちまち羅洛の髪も眉もこげてしまいましたが、ひるみませんでした。火焰山を過ぎると、氷の海に着きました。その寒さと冷めたさは気を失いそうでしたが、羅洛は耐えました。

こうした千辛万苦の果てに、やっと仙女の住む北海の島にたどりつきました。

仙女の島は百の花が咲きみだれ、小鳥がさえずり、陽がさんさんとさしていました。

黒馬の羅洛は、竹林に入り、とある屋敷の前にとまりました。

家の中では四・五人の仙女たちが、羅のおっかさんの錦布を見ながら、錦織りをしていました。そして、家に入って来た羅洛を見つけると、手を休めました。中でも一番年か

さの仙女がこういいました。

「やっぱり探し出しましたね。お前のおっかさんの錦が余りに美しく織られているので、いたずらの妹が取ってきてしまったのですよ。許して下さい」

年のいかない仙女が赤くなってうつつむいているのを見て、そのかわいらしさにうっとりしました。

「今晚、一晩だけ持して下さい。もうすぐ織ってしまえそうなので。」

大仙女はそう頼むと、めずらしい果実やごちそうを出し、羅洛をもてなしました。

羅洛はいつしか眠り込んでしまい、ふと目をさましたところ、一人の仙女が機の前に座り、独言をつぶやいているのが耳に入りました。

「どうしても、こんなにはうまく織れない。牛や羊の毛の光り、稲穂の黄金色、そして清々しい空気……。私には織れない。これを織った羅のおっかさんは巻絵の絵だけでなく、自分の夢もこの中に織りこんだ……。きっとそのために、このように美しいに違いない……。私もこんなところに住みたい。そうそう、この錦の中の娘の顔には、まだ目鼻が織っていない。私の顔を織っておこう……」

やがてその仙女は織り終ると、そっと眠ったふりをして羅洛の前に置きました。

羅洛は返してもらった錦布を懐にしまい、再び黒馬に乗り、竹林を抜け、水の海、火焰山をくぐり抜け、やっと家にたどり着きました。

大喜びのおっかさんは錦布をひろげて見て、「羅洛や、羅洛や、この娘は、お前の嫁だ

よ！どうしても今までこの顔は織れなかったのに。今、わかったよ！」と叫びました。

その時です。匂ぐわしい香りの風があたりに吹き込んできました。それと同時に、羅のおっかさんの錦は、しっしっ、すっすっ……とどこまでも広がり、またたく間に、以前の石ころばかりの土やかれた木々が姿を消し、錦の絵そのものの景色となっていきました。軒の傾きかけた家も、すっかりした家になっていました。そして、池の辺りには若い娘がいるではありませんか。娘は羅のおっかさんと羅洛の方へ近づきながら言いました。

「私は羅のおっかさんの錦を持って帰ってしまった仙女です。この山や水は天からの贈りものです。そして、私は、自分の顔を錦の中に織った縁で、羅のお嫁になります。」

羅洛と羅のおっかさんは、花のような仙女と手をたずさえて、この美しい桃源境に入っていく、ゆったりとくらししました。